



魔界の扉

川崎ゆきお

「魔界への扉は何処にあるのでしょうか」

「それは何処そこにあると簡単に言えるのなら、みんなそれを聞いて魔界に入っておるわな」

「まあそうなんです、道師なら、それを知っておられ、こっそり教えてくれるのではないかと思ひまして。いえ簡単には教えてくれないことは覚悟しております。だから、何かをやることで、教えていただけるのではないかと」

「そのようなクエストを果たさなくても教えてやるが、魔界への扉は教えられるものではない」

「しかし、道師は魔界へ入ったという噂が……」

「それは噂ではなく本当のことじゃ」

「魔界とはどのようなものなのでしょうか」

「よう分からん」

「はあ」

「だから、そんなところに入っても、なんと言うことはない」

「では、道師はどのよな手段で、魔界へ入られたのですか」

「特にない。偶然じゃ」

「それを教えてください。無理ですか？」

「教えるだけなら無理ではない」

「では、お願いします」

「魔界の扉がある。そこから入れる」

「だからあ、それは分かっているのですが、その扉は何処にあるのですか」

「分からん」

「分からないのに入れたのですか」

「今考えると、そうじゃな」

「何処ですか。場所を教えてください」

「扉がある。普通の扉じゃ。向こうが見えぬ戸なら、何でもいいのではないかな」

「扉、戸、窓でもいいのですか」

「ああ」

「それらは具体的です。いきなり空中に出入り口が現れるのではないのですね。そして、精神的なものでもなく、しっかりとした場所があるのですね」

「わしの場合はな。ここで修行中に入れたわけではない。足で入る」

「はい。で、場所は」

「わしの場合でよいか」

「はい」

「この先に小高い丘がある。三角の丘なので、すぐに分かる。その麓にお堂がある。何やら祭ってある。何かよう分からんものがな。そのお堂の扉が開いていた。そして中に入ると、そこが魔界だった。お堂の中に別の風景があった。見たようで見たことのない山並みが続き、足を踏み入れたところは溪谷じゃった」

「それは、ただそのお堂を通り抜けただけなのではありませんか」

「違う。そのお堂近くの風景とは全く違うし、山並みも見たことのない形」

「あ、はい」

「わしは、恐ろしゅうなって、すぐに引き返した。その扉へな。そして、いつもの山道に戻れた。お堂前の道にな」

「行ってみます」

「それはいいが、無理だと思う」

「はあ？」

「わしも、再三そのお堂へ通ったよ。もう一度入ろうと思ってな。しかし無理じゃった。扉を開けるとお堂の中。それだけじゃ。当然入り口は一つ。裏に抜ける扉もない」

「はあ、まあ、見学して来ます。しかし、どうしてなんでしょうねえ」

「当然わしも考えた」

「分かりましたか」

「自動ではないかな」

「自動」

「自動扉じゃ」

「はあ」

「誰かが自動扉から出た。あるいは入った。その後、自動が故障した。開きっぱなしになった」

「それが解ですか」

「だから、最初から開いておったんだ。だから入れた。閉め忘れではなく、装置のちょっとした狂いか、癖だと思う」

「では、その自動扉を使って出入りしたものがいるわけですね」

「だろうねえ」

「分かりました」

「だから、教えても魔界へは入れるものではないのじゃ」

「まあ一応見に行つて来ます」

「気をつけてな」

「はい」

了